



文苑

偶作六首

佐々木信綱

春の野につくし摘む子ら子らの如

われも幼なき時はありしを

學ひやゆ歸りこし子のはこりかに

かきてはみするちりぬるをわか

撫子に花さかせむとかのが身の

春はすくし、女教師の君

ねもころに子らを教ふと老て猶

鞭とりませる師の君あはれ

七つ子のいたづらざかり親だにも

手にあまれるを教へます君

鬼か嶋せめて歸りし勢ひに

門より歸る學ひやの子ら

馬二十五首

(竹拍會兼題)

樺山常子

ひな歌をうたひかはして馬曳て

野道すき行く童への友

松平岳子

いつくにか急きゆくらんますらをの

手飼の駒に鞭おはせつゝ

増山深雪子

われに荒れて向ひより來る放れ駒

道行きふりのむねそとゝろく

板倉止子

いさましや外國迄も踏ゆかん

ますらたけをの乗ませる駒

堀越科子

紫のせて馬の綱とる童への

背にも薪をかひて行く哉

松井友子

馬の背にまひは眠りてゆひつけし

花に小蝶の狂ひく行く

三宅貞子
ほまれあるけふの戦ひのる駒も
ともに勇むか高く嘶く

大竹伊勢子

ゆるひなく心の駒に鞭うたん

道の長手はよし遠くとも

岩本美玖子

荒駒の風にいなく聲かれて

枯野五十雪西に飛ぶ

岡田文子

やめる夫の薬の料と馬市に

馬引行けは朝風さむき

田中たを子

たくましき馬に鞭うちいてましゝ

君かみ姿見むよしのなき

中村文子

松林馬ひきかへる人かけよ

あのひな歌よ我背なるらん

有賀晴子

それとなく歌にまさらし引く綱を

君やあやしむ花よめの君
關屋愛子

なれなくは妻子三人をいかにせん

我屋のかまと馬にさりける

久保花子

かなひたる其ねき事や何ならむ

社の軒の新しき繪馬

市田豊子

ますらをか駒のりならず夕くれの

馬場のあたり花ちりみたる

森田妙子

馬あらふ里の小川の夕くれに

光たよふ三日月のかけ

片山柳子

打つゝく水田の中に馬一つ

繪にある如き此處のさま哉

小林茂子

夕まくれ父はあるきていとし子を

馬にのせゆく畑道かな

遠山直子

故も又國をや思ふますらをの

駒そいさめる戦のさま

松本文子

霞たつ野原にむるゝ若駒の

別れくにならんとすらん

池谷淺子

月おぼろあたりしつけき春の夜に

老馬をなてゝゑむ翁かな

小笠原政治

のりましゝ主かはふりの朝またき

うまやの中に馬ぞいなゝく

稻垣安子

れそくとも心の駒したゆますは

文の山道いつかこゆるらむ

佐々木雪子

幼なとち木馬にのりて遊ぶかな

みとり涼しき庭の芝原

雑詠三首

聞郭公

おもひねの夢かあらぬか郭公

たゝ一こゑをありわけの空

名所河

ことゝひしむかしを語れその世より

すみたの川のみやことりはも

曉水鶏

ひとをまつ心ならひにたゝく戸を

わけてくひなのあかつきの聲

雑詠三首

鷺

友の結婚を祝ひて

色かへぬ千世のはしめの若緑

ふかさ契りや相生の松

春を惜みて

梓弓はるのゆくへをたつねてぞ

ひくまの野邊にかりくらしける

水